

				<ul style="list-style-type: none"> ・ 事業アークテクトとして修得する知識・スキルに加えて、実践的PBLに事例研究を追加するべきである。
--	--	--	--	--

基準2：学生受け入れ方法

番号	評価項目	評価	根拠・指摘事項
1	<p>学習・教育目標を達成するために必要な能力を持った学生を事業プログラムに参加させるため、参加基準を明確に設定しており、学内外に公開していること。それを選抜の方法等に反映させて、公正、適切に実施していること。</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ ガイダンスやアンケートを通じて定員の10名を決定されている。基準は明確であると思われるが、実際にその人たちが将来事業アークテクトとなりうる人材であったかは今後注目し、場合によっては基準変更すべきである。 ・ リーフレット等により明確化され、具体的な選考が行われたと判断できる。 ・ 受け入れ情報は広く公開されている。一方で講師の客観的評価を定期的に実施し、常に先端かつ具体的情報の提供をお願いしたい。 ・ 社会経験のある優秀な学生が集まり、お互いを高めることが期待される。

基準3：教育方法

番号	評価項目	評価	根拠・指摘事項
1	<p>学生に事業プログラムにおける学習・教育目標を達成させるために、カリキュラムを体系的に設計しており、当該専攻に関わる学生および教員に開示していること。</p>	S	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「講義・演習科目」「事例研究型科目」「PBL型科目」と3つの科目群により、専攻横断型に体系化されている。 ・ 追加された科目は、だいたい必要領域をカバーしているように思えるが、具体的内容をどうするかは要検討。 ・ 個別には、改善(事業アークテクトチャ設計の実施方法など)が必要そうだが体系的には十分。MOT, UXDも入れると良い。 ・ 目的に沿ったカリキュラム作りに努めているが、AIITの特徴をもっと打ち出すべき。例えば、デザインシンキング×アジャイルITの構成を強めるなど。 ・ 知名度向上の取り組みが必要。ビジネススクールの名前を借りて知名度を上げ、違い・差別化を示すと良い。

出所など：日本技術者教育認定機構「専門職大学院認証評価報告書」を編集、抜粋して作成

2	<p>事業関連カリキュラムでは、実践教育を充実させるために、講義、討論、演習、PBL、インターンシップ等、適切な教育手法や授業形態を採用し、各科目と学習・教育目標との対応関係を明確に示していること。</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 年2回のPBLプロジェクト成果報告会や外部評価委員会など実践的な教育についてチェックする仕組みに取り組んでいる。 ・ 講義で足りない部分をPBLで補おうとしている。 ・ PBLについては、28年度スタートにつき、評価が難しいものの、PBLキャンペーンから想像すると、特に問題ないと思われる。 ・ 社会人、業務経験を持つ学生向けに座学と実践のバランス、学習環境の配慮はなされている。 ・ なぜ経験の蓄積とコンピテンシーの修得が可能か、教育の事例を示すと良い。
3	<p>事業関連カリキュラムの設計に基づいて授業に関する授業計画書(シラバス)を作成し、当該専攻に関わる学生および教員に開示していること。</p> <p>また、シラバスでは、科目ごとに、カリキュラム中での位置づけを明らかにしており、その教育の内容・方法、履修要件、この科目の履修により達成できる学習・教育目標、および成績の評価方法・評価基準を明示し、それに従って教育および成績評価を実施していること。</p> <p>なお、成績評価にあたっては、各学生のその科目の最終的な合否・水準判定だけでなく、シラバスに記述された達成が期待される各学習・教育目標に関し、それらの個別の達成度評価にも努めていること。</p>	S	<ul style="list-style-type: none"> ・ シラバスシステムにより教育内容・方法・履修要件・達成目標・成績評価など必要な項目が明示されている。関係者に配布されるほか、Webサイトで公開されている。 ・ 科目とその履修により獲得できるスキルを明確に関連づけている。 ・ シラバス等で明確化している。 ・ シラバスの設計、開示、合否判定などは充分出来ている。個別評価も良いが、どのような人物像を目指しているか、イメージしているかを示せると良い。 ・ 成績評価の可視化が行われている。
4	<p>学習・教育目標に対する学生自身による達成度の継続的な点検や、授業等での学生の理解を助け、勉強意欲を増進し、学生の要望にも対応できる仕組みの構築、学生および教員への仕組みの開示、およびその仕組みに従った活動の実施に努めていること。</p>	S	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事業アーキテクトに必要な能力をCSFのBOKを使って定義、取得レベルを確認することができる。 ・ アンケートを含め、質の改善への取り組みがある。 ・ ただし、実際の実務の場から見ると、先端的知識を科目の内容に組み込む工夫はもっと欲しい。 ・ 成績の記録・評価がビジュアル化(レダチャート表現)されるのは良い。 ・ 学生への継続的なフォロー・フィードバックの仕組みは充実している。少数の受講生なので、メンターによる各人への助言の仕組みを強化すると良い。彼等が将来の支援者となる。

出所など：日本技術者教育認定機構「専門職大学院認証評価報告書」を編集、抜粋して作成

基準 4 : 教育組織

番号	評価項目	評価	根拠・指摘事項
1	事業関連カリキュラムを適切な教育方法によって展開し、教育成果をあげる能力をもった十分な数の教員と、産業界等との協働による事業支援体制が存在していること。	S	<ul style="list-style-type: none"> 運営諮問会議に加えて社会人学び直し推進委員会、プログラム開発委員会、外部評価委員会により支援を受ける仕組みである。定員 10 名に對して専任 12 名と十分な教員数となっている。 実務経験のある教員が多いことは良い。 ただし、新陳代謝の工夫は必要ではないかと思われる。 専任教員だけでなく、産業界から専門家を招聘している点が評価できる。 外部実践者、企業家の話はととても貴重なので、積極的に展開してほしい。 運営・普及・評価の委員会が充実。
2	事業関連カリキュラムに設定された科目間の連携を密にし、教育効果を上げ、改善するための教員間連絡ネットワーク組織があり、それに従って活動を実施し、有効に機能していること。	A	<ul style="list-style-type: none"> 月 1 回定例会を開催し、研究科長、両専攻長、小山教授などプログラム開発責任者が出席している。 ケース授業の実地トレーニング等の取り組みがきちんと行われている。 定例会等で、教員間のネットワークが構築されている。 情報共有は充分である。外部講師の定期的見直しはしてほしい。学生評価は強制的にやるべきである。

基準 5 : 学習・教育目標の達成

番号	評価項目	評価	根拠・指摘事項
1	事業に関わる学生に学習・教育目標を達成させるために、修了認定の基準と方法が適切に定められ、当該専攻にかかわる学生および教員に開示していること。またそれに従って修了認定を実施していること。	A	<ul style="list-style-type: none"> 事業アークテクトコース独自の修了要件を定めている。 修了要件は明確と思える。 要件が明確化され、実践されている。 客観的評価に努めているし、透明性ある修了基準と開示は徹底されている。

基準 6 : 教育改善

出所など：日本技術者教育認定機構「専門職大学院認証評価報告書」を編集、抜粋して作成

番号	評価項目	評価	根拠・指摘事項
1	点検・評価システムは、社会の要求や学生の要望に配慮する仕組みを含み、また、点検・評価システム自体の機能も点検できるものである。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業アンケート、外部評価委員会による点検システムが整備されている。 ・ 科目の具体的コンテンツレベルで社会の要求を組み入れる工夫をもつと入れて良いのではないかと。 ・ 学生からのフィードバック収集に工夫が必要ではないかと思われる。 ・ 継続的な改善活動は行われている。講師、先生方の学生への日々の気付きや問題・課題発見も常時共有すると良い。 ・ 授業アンケートには、分析・フィードバックの仕組みが必要である。アクションプランを立てている。評価委員会などを設置している。

基準 7：事業計画の進捗

番号	評価項目	評価	根拠・指摘事項
1	平成26年度の活動目標は当該年度中の成果実績として達成されている	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既に達成され、報告書として公開されている。 ・ 具体的にコース設計されて、平成27年より開始されている。 ・ 初年度実績として、事業設計は充分練られてフィードバックも出ている。
2	平成27年度の活動目標は当該年度中の成果実績として達成されている	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 計画通り達成されている。 ・ 平成27年より実際に授業が行われている。 ・ 改善は継続的に進化しており、成果実績は出ている。

出所など：日本技術者教育認定機構「専門職大学院認証評価報告書」を編集、抜粋して作成

4 次年度以降の計画

4.1 平成 28 年度計画

平成 28 年度は、平成 27 年度から継続して、教材の実証実験と、学び直し啓発のための学修コミュニティイベントの企画・開催、教育プログラム(大学院修士課程)の試行運用、PBL キャンプを開催する。また事業成果報告等は、Web サイトでの情報公開、カンファレンス開催、報告書で行う。

- 教育プログラムの試行運用(通年、事業アーキテクトコース 2 年次の PBL 試行運用開始、新規事業戦略科目として「コンセプトデザイン特論」を追加開講)
- 学修コミュニティイベント開催(社会人学び直し啓発・社会人一般対象)
起業塾 4 回程度
- Web 記事作成・掲載(社会人学び直し啓発)
- 社会人学び直し推進委員会開催 3 回
- プログラム開発委員会開催 3 回(作業部会 4 回程度)
- カンファレンス開催(関係教育機関・企業等対象、情報交換・進捗報告) 1 回
- 外部評価委員会 1 回(学外の委員、大学及び産業界から 5 名程度)
- 教員研修(事例研究及び PBL)
- 教材の実証実験、PBL キャンプ
- 当事業の情報公開 Web サイト(随時更新)、事業成果報告書 作成

表 12: 平成 28 年度計画

4 月	教 育 プ ロ グ ラ ム の 試		社会人学び直し推進委員会①、プログラム開発作業部会①
5 月			プログラム開発委員会①、プログラム開発作業部会②
6 月		起業塾①	プログラム開発作業部会③
7 月		Web 記事①	プログラム開発委員会②、プログラム開発作業部会④
8 月		起業塾②	実証実験①、教員研修
9 月			社会人学び直し推進委員会②、実証実験②、教員研修、PBL キャンプ
10 月		起業塾③	
11 月		Web 記事②	
12 月		起業塾④	

1月	行 運 用		プログラム開発委員会③
2月			社会人学び直し推進委員会③、外部評価委員会、関係者対象カンファレンス
3月			事業成果報告書

4.2 継続性

当教育プログラムは、平成 25 年度の運営諮問会議で答申された本学情報アーキテクチャ専攻及び創造専攻の両専攻横断型のイノベーション人材養成のためのカリキュラムに相当する。したがって、事業期間中の平成 27 年度から当事業で開発する教育プログラムを順次評価するため、両専攻横断型の事業アーキテクトコースとして試行設置する。試行設置の評価から教育プログラムの有効性を確認し、事業期間終了後も、今回設置する両専攻横断型のコースとして継続して設置を維持する計画である。また、本学では、社会人学び直しの重要性は十分に理解しているため、当教育プログラムの志願者増を想定し、将来の専攻改編も視野にいれている。

本学は今まで教員の任期制をとってきた経緯から、教員評価は教育・研究・組織運営・社会貢献の 4 項目で行われている。学内体制は、本学での教員評価項目の中で教育活動に関して、本教育プログラムを推進する教員の評価を高める等、教員の誘因及び動機を重視した体制を取ることで、事業の継続性を確実にすることができる。産学連携体制は、運営諮問会議を中核とした連携体制を維持し、産業界からの意見を反映し、教育内容の改善を継続する。財源に関しては、本学の一般財源費により、本事業を継続する体制の維持、特に当事業の継続に必要とされる非常勤講師等の人件費の予算措置が可能である。